

## モンゴル語における色彩語 ——その用法と色彩観——

鯉 淵 信 一

### 1. はじめに

古来、人間は日常生活のなかで色と深い関わりをもって生活してきた。そしてその色との接触は、ある時には無意識のうちに、またある時には強い関心を払って、生活の多くの場で行われたはずである。それぞれにとらえる色の意味、色彩表現の違いはあるにせよ、おそらく世界のどの民族においても、色に全く無関心な民族はあり得ない。

フランスには「味と色には、誰にも言い分がある」という言葉があるそうであるが、色に対する感じ方は極めて主観的なもので、見る人、見る時、見る環境などによって、同一民族間においてさえ一様ではない。ましてや自然環境、あるいは文化の質的差異の大きな民族間にあっては、色に対する接し方、感じ方が異なるのも当然のことであろう。

日本人とモンゴル人の間には、色に対する見方、考え方に大きな相違が読みとれる。田畑を耕し、土と切離すことのできなかった日本人の生活と、馬を駆って、草原に羊や馬を放牧するモンゴル人の生活との間には、自然に対する接し方に大きな相違がある。また彼らの接するその自然、一年のほとんどが青空の広がる乾燥しきった空気と雄大な草原には、日本では見られない色彩がある。同時に比較的穏やかで、湿潤な四季の移り変りのなかで多くの色彩を見せる日本の自然には、モンゴルにはない色彩が存在している。

日本人は道端の小さな草花にも繊細な観察の目を注いで、その色の移り変りにさえ関心を払ったが、馬上に生活するモンゴル人にとっては、そうした草花の色の移り変りはいうに及ばず、草花自体も関心を示す対象ではなかったのである。

モンゴルの風景のなかには、春霞が棚引くような、あるいは秋が深まるにつれて、木々が一葉一葉その葉を落してゆくといった景色はない。モンゴルの春は砂嵐の中で通り過ぎ、秋の紅葉は急激な厳寒の到来によって一夜にして落葉してしまう。そこからは日本人が好む霞んだような、燦々としたような、あるいは色が移ろうといった色彩観は生まれにくい。日本人には一種の風情として受取られる雪景色も、零下30度、40度に達する厳寒のなかで家畜を放牧しなければならないモンゴル人にとっては、

"Tsagaani muu tsas

白いものの中で悪いものは雪

Tsagiyn muu dayn”

世の中で悪いものは争い

という諺にあらわれているように決して観賞の対象ではない。

しかしこれらは、モンゴル人が色彩に乏しいということではない。モンゴル人は、彼ら自身を取りまく自然環境と経済的基盤であり、精神的支えでもある家畜を背景に独自の色彩観を生み出している。日本人の色彩観の基礎が草花や植物染料であるのに対して、モンゴル人の色彩観の一つには、馬を中心とした動物の毛の色がある。彼らは驚嘆すべき観察力で動物の毛の色に独自の色彩を発見している。そして、その色彩の分類にしても、我々とは異った分類体系をもっているようである。

例えば、シャルガ (sharga) という毛色の馬がいる。小沢重男編『現代モンゴル語辞典』<sup>(1)</sup>には「淡黄色の、クリーム色の」という訳がついており、磯野富士子氏は「薄鹿毛馬」、村上正二氏は「川原毛馬」<sup>(2)</sup>と説明しているものであるが、この sharga の範疇を調べてみると、薄いクリーム色から黄色、そして小豆色のような赤茶色系まで含まれている。即ち、モンゴル人は薄いクリーム色－黄色－小豆色は同系統の色と見ているということである。

## モンゴル語における色彩語

またモンゴル人は xöx (青) という色を好み、衣服などに好んで取入れている。そしてモンゴル自身を xöx monggol (青きモンゴル) と呼び、また彼らの信仰の対象である「天」(tengger) を xöx tengger (青き天) と呼んだりしている。モンゴル人が抱く「xöx」のイメージは、後述するように日本人の「あお」(青) とは大きな相違がある。

このようにモンゴル人の色彩観には、その風土及び文化的伝統、歴史、社会習慣に根ざした独自のものがある。本稿はそうしたモンゴル人の色彩観を明らかにしようとするものである。色彩表現の実例をモンゴル語辞典、『元朝秘史』、諺などのなかに求めながら、モンゴル語における各色の意味と用法、色彩観、生活のなかでの色との関わり合いなどを考察する。

なお、モンゴル語の色彩語あるいは色彩観に関する研究は、これまで充分には進められていない。卑見の限りでは、モンゴル学の碩学 N. ポッペ教授 (Nicholas Poppe) の研究「The Use of Colour Names in Mongolian」<sup>(5)</sup> が本格的色彩語研究の唯一のものではないかと思う。ただ1982年8月、ウランバートルで開催された第4回国際モンゴル学者会議には、「Monggolin Xee Ugalzni Önggiyn Gogtsoltsooni tuxay Asuudal」(モンゴルの模様の色彩体系に関する問題) L. バトチョローン、「Monggolin Ertniy Uran Barilga daxi Önggö」(モンゴルの古代建築における色彩) M. トーヤの二報告が提出された。これまでは語彙研究あるいは社会習慣の面から若干の色彩語が論じられるに過ぎなかったが、漸く、「色彩」に研究対象としての関心が高まってきたといえる。

上述ポッペ教授の研究は、「黒」「白」「赤」「黄」「緑」「青」「灰」について、それぞれの色を、色彩名としての用法、比喩的な用法及び特殊な用法として植物名、動物名にあらわれる色彩名の三種類に分類したものであるが、各項目には例文が付され、示唆に富むものである。本稿を進めるに当たっても得る所が多かった。

## 2. モンゴル語の「Önggö」(色)の意味

日本語の「色<sup>いろ</sup>」は幅広い意味をもった言葉である。『広辞苑』(新村出編・岩波書店)にその意味を求めてみると、色彩に関連したもの、容姿の美しさ、ものの趣き、愛情、愛情の対象たる人、姿勢、様子、調子、種類、品目などと実に多様である。「色」を用いた熟語フレーズに至っては色揚げ、色遊び、色合い、好色、色相、色つや、色香、色盲、色弱、色がまし、色狂い、色探し、色を失う、色を損ず、色を作る、色を付ける等々数限りない。

日本語の「色」を意味のうえから分類すると、色彩、様子、調子、姿勢などのように外観的状况を表わすものと、色事、色心、色情、色欲、色仕掛け、などにみられるような男女の情愛を表わすものとに大別することができる。また外観的状况を表わすものは、さらに色彩が認識できるもの、例えば顔色、色揚げなどのように「色」本来の意味が保持されているものと、旗色(姿勢)、音色などのように色彩が認識できないものとに分けることができる。

これに対して英米語の「Colour, color」は、それほど複雑さはもっていないようである。赤池鉄士氏は『英語色彩の文化誌』の中で、英米語の「Colour, color」の意味を分析し、「日本語の中に見える男女の情愛の意味は単語の意味の中にも熟語の意味の中にも見当たらない。あえてこれに近い意味を求めるならば、米俗語としての off color または off-color に“<sup>(6)</sup> いかかわしい” “きわどい” という意味があるがこれとて同意であるとは言えない」と述べている。

ではモンゴル語の Önggö (色) の場合はどうであろうか。まずモンゴル語の Önggö に関する意味と熟語フレーズ類の主なものを、いくつかの辞典類から抽出してみる。

Önggö の名詞としての意味で記載されているものには——前掲『現代モンゴル語辞典』には、色、色彩、表面、〔衣服の〕表、美貌、外見、獣の毛色、

## モンゴル語における色彩語

様子、調子などがある。他の辞典類の記載もほぼ同様であるが、『蒙漢簡明詞典』(内蒙古大学蒙古語文研究室編)<sup>(7)</sup>には、この他に顔色、正面、音色、音質などの語がみえ、また『Mongolian-English Dictionary』(F. D. Lessing)<sup>(8)</sup>には appearance, lust, sexual passion などの語がみえる。

また Önggö に関する熟語フレーズの主なものを取り上げてみると次のようなものがある。

前掲『現代モンゴル語辞典』には önggö aldax (褪色・変色する)、önggö buurax (褪色・変色する)、önggö büriyn, önggö önggiyn (多彩の、雑色の)、gialgar önggö (明るい色)、önggö orox (つやが出る、美しくなる)、sayxan önggötey alchuur (美しい色彩のハンカチ)、önggö züs (外観、容貌)、önggö nexiyn deer (表地のない毛皮外套)、önggö darsand shagnax (放らつな生活を送る)、önggö üzüülex (善人ぶる、欺く)、duuni önggö (音色)、önggöniy övchin (花柳病)、önggögüy (色のない)、önggötey (色のついた、彩色のある、美しい)、などがみえる。

前掲『蒙漢簡明詞典』には、これらのほか xergiyn önggö (事件の概況)、gazarin önggö (地表)などがみえ、önggögüy については色気不佳(気色が良くない)、無生氣(生氣がない)、死氣沈沈(沈んでいる)、沒有外皮(外皮がない)、沒有面子(面子がない)、無表層(表層がない)などの説明がみえる。

また『Monggol Xelniy Tovch Taylbar Toli』(Ya. Tsevel, Monggol Ulsin Xevleliyn Xereg Erxlex Xoroo)には「Örönd unaval ügiyrne, önggönd unabal uxne」(借金に陥れば破産し、色に陥れば死ぬ)といった諺がみえる。

önggö の派生語を同上の辞典類から抽出してみると、まず『現代モンゴル語辞典』には、önggölmöl (磨かれたもの)、önggölöx (つやを与える、磨く、光沢をつける、上塗りする、外装する、粉飾する、いつわり欺く)、önggölüür (採色器)、önggöch (しゃれ者、おべっか者)、önggöchlöx (しゃれる、おべっかを使う)、önggöshröx (塗装したり、拭いたりして表面につ

やを出す)などがあり、『蒙漢簡明詞典』には、このほか önggölög (着色、塗装、粉飾、美化、偽装、朦朧、象嵌等の説明あり) önggöts (表層、表面、薄い色、不確実、派手、狡猾等の説明あり)などの語が、また Ya. Tsevel 編には önggöldöx (磨かれる、外装される、粉飾される)といったものなどが見出される。

こうしてみると、モンゴル語の önggö (色) は日本語の場合と同じように極めて幅広い意味をもったものであることがわかる。色彩に関連したもののはもとより、容姿、様子、状勢、種類、調子、さらには男女の情愛を表わす意味まで含んでいる。

男女の情愛を表現する意味としては、前掲の辞典類には F. D. Lessing のなかに lust, sexual passion の二語がみえるのと、Ya. Tsevel が諺を引用してそれを提示しているだけで、他の二辞典には全く記述されていない。しかし男女の情愛を意味する önggö の表現は、決して特殊な用法ではなく、Ya. Tsevel の前掲諺以外にも、男女の情愛を意味する önggö があらわれる諺は少ない。

モンゴル語の「önggö」の意味をとらえるうえで参考になるので、「önggö」に関するいくつかの諺を挙げておく。(諺は「Tsetsen ügiyn Dalay」<sup>(9)</sup>を参考にした。以下同じ)

- |                                  |                  |
|----------------------------------|------------------|
| ※ Önggö ni naana                 | 色はこちら側に          |
| Örgös ni tsaana                  | トゲは向こう側に         |
| (この「önggö」は、見栄えの良いもの、女性、甘いもの等の意) |                  |
| ※ Önggönd büü xuurt              | 色に欺されるな          |
| Örönd büü barigd                 | 借金につかまるな         |
| (この「önggö」は、上と同じ意)               |                  |
| ※ Önggönd lam xuvtsastay         | 色(うわべ)は、ラマ僧の服(衣) |
| Ünendee naymaa panztay           | 実際は、商売人          |
| (この「önggö」は、外観、表面の意)             |                  |

## モンゴル語における色彩語

- ※ Önggö mönggö niylbel                      色と金と一緒にになると  
 Ünen xudal yargaxgüly                      真実とウソが区別できない  
 (この「önggö」は、美しいもの、男女の情愛の意)
- ※ Önggöteygees uxaantay ni deer

色をもつより、知恵をもつ方が良い  
 Ölöngöös tsatgalan deer                      飢えているより、満腹の方が良い  
 (この「önggö」は、着飾る、美しいものの意)

尚、小沢重男氏は「古代日本語と中世モンゴル語比較研究」(風間書房、昭和43年)のなかで日本語の「色」(イロ)とモンゴル語の「色—特に顔色、顔貌」を表わす「züs — jisün」を同源ではないかと推定されている。(47頁)

## 3. モンゴル語の色名

日本語の伝統的な色名は、草花や植物染料の名前からとられたものが圧倒的に多いことは良く知られている。これに対して、モンゴルでは馬を中心とした動物の毛色がその一つの基礎になっている。

モンゴルは、近代文明の波が押しよせるほんの4,50年前まで、昔ながらの遊牧生活を送ってきた。そして彼らの遊牧生活の周囲にはチベット系のラマ教に関連した色彩である寺院や仏画を除くと、自然以外の「色彩」はほとんどなかったといえる社会であった。しかし彼らは豊かな色彩用語をもち、独自の色彩文化を発展させてきた。それには彼らの生活の支えであり、生きがいでもある馬や牛に対する関心が重要な役割を演じたのである。即ち、モンゴル牧民は貴重な財産である馬や牛の群れを掌握、管理するために独自の色彩分類を必要とし、それを発展させてきたのである。

日本の馬の色別は栗毛馬、鹿毛馬、河原毛(瓦毛)、茸毛雲雀馬等々その毛色を表わす別の植物や動物の名をもって表現されることが多い。そしてその毛色名は馬の色別にだけ通用するもので、日本語の色名全体に大きな

影響を与えることもなく、しかも馬の利用がほとんどなくなった現在では、その毛色名自体が我々の生活から失われつつあるかのように見える。

これに対してモンゴル人は身近かな動物、特に馬を毛色別、雌雄別、年令別などごとに特定の語をあてて、驚くべき細かさで分類する。そしてその毛色名は、モンゴル語の色名全体の中で大きな比重を占めている。馬の毛色名が彼らの基礎色名になっている例さえ少なくない。例えば「sharga」という色がある。これは「shar」(黄)から派生した色名で淡黄色の毛色の馬を指すが、この「sharga」は同系統の色彩の基本的な色名となっている。

「sharga」系統の主な色名をみると次のようなものがある。「tsayvar bor sharga」(とうもろこし色)、「uxaa nogoonduu sharga」(うこん色)、「xundan sharga」(山吹色)、「sharga xaliun」(クリーム色)、「xaliun sharga」(薄香色)、「xüren bor sharga」(赤香色)、「ulvar bor sharga」(小豆色)等々。これらの色名は、ほとんどがそのまま馬の毛色名となるが、「sharga」という毛色名が一種の基本色名となって複雑な系統色名が作られていることがよく分る。

ところで、民族の伝統的な色名を理解するのは非常に困難な問題である。  
くちなしいろ 梔子色、あいいろ 藍色をモンゴル人に説明しても、梔子を見たこともない彼らがどれだけの確にそれを理解するか疑わしい。同じように「zeerd」(赤黄色の馬— *zeer* = かもしかの一種 = の派生語)といわれても我々日本人には良く理解できない。さらに基本色名で呼ばれる色の範囲でさえかなりの違いがあつて的確な理解は難しい。

色名の説明がいかに難しいかをみるために、試みに辞典から色名の翻訳をいくつか抽出してみよう。まず灰色系統の色を見てみる。

bor — 灰色、浅黒い、bor xar — 黒っぽい、灰色、saaral — 灰色、  
 xöx saaral — 灰色、xar bor、xar saaral — 黒灰色

次に茶系統を抽出してみる。

xüren — 肉褐色、褐色、yxaa — 薄栗色、やや人参色、xeer — 栗毛色、



## モンゴル語における色彩語

xar xeer — 濃い栗色、xar xüren — 暗褐色、xüren ulaan — 赤紫色、  
ulaagch — 赤ちゃけた、zeerd — 赤黄色・人参色、ulaan zeer — 栗毛  
色

次に青系統を抽出してみる。

xöx — 青色、空色、xöx tsenxer — 白みがかった青、xöx saaral — 青  
灰色、xöx bor — 青みがかった褐色、xar xöx — 深い青色、紺色、  
tsenxer — 空色、淡青色、紺青色。

上の抽出は前掲の『現代モンゴル語辞典』に拠った。この辞典はモンゴル  
を含めて世界で出版された主な辞典を参考にしながら編纂されたもので、  
現在最も信頼し得る辞典の一つである。その辞典でさえこの曖昧さである。  
bor と saaral の「灰色」、xöx と tsenxer の「青色、空色」あるいは茶系統各  
色の相違、それぞれの色の性格を、この記述から知ることとはほとんど不可  
能であろう。これは文化的基層の異った他民族の色を理解し、かつ数語の  
日本語で表現することの困難さを証明している。

モンゴル語の色名を研究するうえで、できるだけ多くの色名を集めるこ  
とは基本的要件であるが、これまで具体的な色見本(特に中間色)を提示し  
て、モンゴル語の色名を付与したという報告は出ていないようである。そ  
こで僅かではあるが参考までに筆者の集めた色名94種を例示してみる。な  
お色見本および日本語色名は大日本インキ化学の出版した「日本の伝統色」  
(第1版)による。また回答者は38才男性、42才女性の2名、場所はウランバー  
トルである。(番号は「日本の伝統色」色名番号)

にゅうはく 乳 白	945— stütn tsagaan
はいじろ 灰 白	946— tsagaan saaral
ふかがわねず 深川鼠	949 — ünsen saaral
くりいろ 皂 色	959 — xar saaral
ぼたんいろ 牡丹色	934 — üzmen yagaan
つつじ色	935 — uxaa yagaan

ぎんねず 銀鼠	947 — zegel saaral
りきゆうねず 利休鼠	953 — tsayvar nogoon
にびいろ 鈍色	952 — xar nogoon
さくらねず 桜鼠	948 — yagaan saaral
うめむらさき 梅紫	940 — xüren yagaan
はいむらさき 灰紫	931 — xöx saaral
けしむらさき 消灰色	958 — baraabtar nogoon
けしむらさき 滅紫	932 — ulaan yagaan
くろむらさき 黒紫	933 — baraan yagaan
しこんいろ 紫根色	942 — bor yagaan
こんねず 紺鼠	902 — xöx saaral
あいねず 藍鼠	901 — büdeg xöx saaral
はいあお 灰青	900 — tsayvar xöx saaral
つゆくさいろ 露草色	887 — tsenxerdüü xöx
はなあざき 花浅葱	886 — nogoon tsenxer
うすぐんじょう 淡群青	895 — tsayvar tsenxer
孔雀青	883 — xöx nogoon
群青色	892 — xöx tsenxer
こきはなだ 濃縹	897 — nogoonduu tsenxer
あいいろ 藍色	889 — tsenxerduu nogoon
こんぺき 紺碧	888 — tsagaan tsenxer
かきつばたいろ 杜若色	920 — tsayvar yagaan
こんいろ 紺色	899 — xöx saaral
こんじょう 紺青	893 — baraan tsenxer
ぶどう鼠	915 — bor saaral
あさむらさき 浅紫	930 — zevxiy bor saaral
ふじねず 藤鼠	913 — zevxiy saaral

## モンゴル語における色彩語

ふじむらさき 藤 紫	906 — zevxiy yagaan saaral
ふじいろ 藤 色	905 — xöx yagaan saaral
ききょういろ 桔梗色	907 — tsenxer yagaan saaral
こゑむらさき 濃 紫	929 — xüren saaral
なすこん 茄子紺	912 — xar saaral
江戸紫	926 — xüren yagaan saaral
小鴨色	864 — nogoovtar tsenxer
くろみどり 黒 緑	859 — borovtor nogoon
みるあい 海松藍	854 — nogoon saaral
てついろ 鉄 色	868 — xöx nogoon
きびなんど 錆納戸	866 — nogoon saaral
みずあさぎ 水浅葱	861 — tsiylen nogoon
うすあさぎ 薄浅葱	860 — tsenxerduu nogoon
あいじろ 藍 白	869 — tsiyvar tsagaan saaral
きびせいじ 錆青磁	856 — tsayvar nogoon saaral
はいみどり 灰 緑	857 — zevxiyduu nogoon saaral
とくきいろ 木賊色	852 — shar nogoon
孔雀緑	863 — gүн nogoon
びやくぐん 白 群	876 — tsayvar tsagaan tsenxer
あおふじ 青 藤	878 — tsayvar xöx
水 色	872 — tsayvar tsenxer saaral
淡水色	871 — tsayvar nogoon saaral
あさぎいろ 浅葱色	881 — tsenxer nogoon
空 色	877 — tenggerlen tsenxer
若竹色	843 — sharavtar nogoon
わさびいろ 山葵色	849 — borovtor nogoon
ふかみどり 深 緑	848 — banxi nogoon

ときわみどり 常盤緑	847 — shargal nogoon
ろくしょう 緑 青	850 — saaralduu nogoon
青竹色	845 — xundan nogoon
松葉色	851 — bor nogoon
草 色	834 — övcön nogoon
ひわ色	830 — shargal nogoon
うぐいす色	818 — xar saaralduu nogoon
おいたけいろ 老竹色	821 — saaral tsayvar nogoon
ひわ茶	815 — bor shar
浅 緑	840 — tsiylberduu güylgen nogoon
びやくろく 白 緑	839 — tsagaan tsiylber nogoon
若葉色	828 — bor shargalduu nogoon
若苗色	827 — tsagaan shargalduu nogoon
きすいせん 黄水仙	802 — tsayvarduu shar
きはだいろ 黄蘗色	803 — nogoonduu shar
とのこいろ 砥の粉色	781 — bor sharga
クリーム	788 — sharga xaliun
ひまわり色	794 — tugalin chatsala shar
こきくちなし 深梔子	798 — tsayvar bor sharga
ぞうげいろ 象牙色	789 — xaliun
うすこういろ 薄香色	780 — xaliun sharga
あかこういろ 赤香色	779 — xüren bor sharga
うこん色	795 — uxaa nogoonduu sharga
山吹色	793 — xundan sharga
とうもろこし色	791 — tsayvar bor sharga
くちなしいろ 梔子色	790 — sharga
あずきいろ 小豆色	729 — ulvar bor sharga

えびちや 海老茶	755 — eleg xüren
けんぽういろ 憲法色	778 — xar xüren
こげちや 焦茶	777 — bor xüren
ふしいろ 柴色	774 — bor xaliun saaral
とびいろ 鳶色	764 — tsayvarduu bor xaliun
すずめちや 雀茶	760 — tsayvar bor
くちばいろ 朽葉色	775 — bor xüren xaliun

上掲のモンゴル語色名が、それぞれの色に最も適したものであるか否かは、もちろん若干の疑問は残る。第一にこの調査回答者は色彩の専門家ではないということである。また、使用した色見本は日本語色名でも分るように極めて微妙な色彩をもつものがそのほとんどである。例えば杜若色、藤紫、藤色、浅紫、桔梗色などの相違は微妙で、藤とか桔梗とかの身近かな草花などの固有色名をあてても、なお的確な色別は容易ではない。見る人によって、見る条件によって藤色は藤紫に、あるいは桔梗色は杜若色に見えることもある。上記モンゴル語色名の場合も同様のことがいえるわけである。

またモンゴル語色名をみると、基本色名と系統色名の組合せによって付けられているものが少なくない。従って固有色名の場合よりも、その色名のもつ色の範囲は広く、また色名自体も固定的でないといえる。

それはさておき、この色名調査をして驚嘆したのは、色彩専門家でもない普通のモンゴル人が、この100種に近い微妙な色に対して実に的確に色名を付与していったことである。ここに提示した色は、日本人にとっては、長い歴史のなかで育ててきた身近かな色であるはずだが、我々自身、伝統的な固有色名ではもとより、基本色名、系統色名の組合せによってでも、どれだけの的確に色名を付けられるかというと実に心許ない。半数に達すれば良い方かも知れない。しかし彼らは、苦もなく、しかも的確な色名を付与したのである。

例えば深川鼠、灰白、紺鼠、藍鼠、灰青という灰色系統の似通った色には、それぞれ「ünsen saaral (灰の灰色)」、「tsagaan saaral (白の灰色)」、「xöx saaral (青灰色)」、「büdeg xöx saaral (ほの暗い青灰色)」、「tsayvar xöx saaral (白っぽい青灰色)」という色名がつけられている。藍鼠や灰青からは、一見「青」は見出しづらいが、彼らはそれさえも明確にとらえているのである。

#### 4. 「Tsagaan」(白)

日本語の「<sup>しろ</sup>白」の語源は、まだ定説はないようであるが、古代日本人の色彩感覚が「明－赤、暗－黒、顕－白、漠－青」という光の感覚にあったことは間違いないらしい。

古代日本の「白」がどんな色であったかについては、『古事記』の天の石屋ごもりの神話にあらわれる「<sup>しろにきて</sup>白丹寸手、<sup>あをにきて</sup>青丹寸手」の白について前田雨城氏が、「おそらく『<sup>しろ</sup>素』のつもりで書かれているものと考えられる<sup>(1)</sup>」と述べている。つまり染付けをしない、楮で作られたままの自然の色ということである。福田邦夫氏も和歌の白さを表わす「<sup>しろ</sup>しろたえ」は「<sup>かじ</sup>穀の木の皮の繊維で織った原始的な布で、白和幣、青丹寸手という白も、同じ布で作られた幣の色の形容だとされているから、その色は現在の純白に近い白色とはほど遠い色であったようだ<sup>(1)</sup>」と指摘している。

モンゴル語の「tsagaan」(白)は、その語源も、また古代モンゴル人が主にどのような色を「tsagaan」と認識していたかも明らかにされていない。現存する最古のモンゴル語文献である『元朝秘史』には17カ所に「tsagaan」があらわれるが、そのほとんどが「aman tsagaan xeer」(口白の栗毛馬)、「tsagaan mori」(白い馬)といった馬の色別にあてられている。そのほかには「tsagaan temee」(白いラクダ)、「tsagaan geer」(白い衣服)、「tsagaan tug」(白い<sup>とく</sup>纛＝旗)、「tsagaan ödör」(白昼)などがあらわれるのみである。ここからは古代モンゴル人の「白」がどんな色であったかは推

測し難い。わずかに「tsagaan üdör」（白昼）という語から、モンゴル語の「tsagaan」にも日本の場合と同じように、光の感覚の要素が入っていたのではないかと推定し得るくらいである。

語源に関する疑問は置くとして、古代の「tsagaan」がどんな色であったかに関しては、私見ではあるが、モンゴル人が家畜の搾乳技術を身につけてから後は、モンゴル人にとって家畜の乳の色が「tsagaan」を代表するものとなり、大切な、尊ぶべき色となったのではないかと考える。

古代においてモンゴル人の目に強く映じた「白」は、半年近くもモンゴルの世界を覆う雪、青空に浮ぶ白い雲、白い羊や鳥、そして家畜の乳などであったろう。

雪はモンゴル人の生活に大きな影響を与える存在ではあるが、その「白」さには「白いものの中で一番悪いものは雪」という諺や「tsagaan zud」（白い害＝雪害）という語に代表されるように、マイナスのイメージが強く、白色のもっている受容的なイメージは少ない。雪の白さには畏れを抱いても、後述するような神聖さや善、幸運のイメージは生まれ難い。

雲の「白」さは、シャーマンの歌などに「青い空の下を、白い雲の上を、青い空の上を、白い雲の下を、鳥よ、飛べ、天に」などという言葉であられるように「白」を代表する一つには違いないが、それほどモンゴル人の生活に密着した存在でもない。また雲の「白」さは、空の青さと対立して生まれるもので、その「白」さも不安定で、後述するような強く、かつ複雑な白のイメージは生まれ難い。

これに対して搾乳技術の獲得は、彼らの財産であり、生きがいである家畜を減少させずに、恒常的な食料確保を実現したという意味において極めて重要なものであった。これはオアシス農耕社会で半農半牧の生活を営んでいた人々が、オアシス地帯から離れて遊牧を専業とすることを可能にした要素の一つであったといっても過言ではな<sup>12)</sup>かろう。

家畜乳の「白」が神聖なものとして尊ばれる例は数多く見出される。二、

三の例を挙げてみよう。

「tsagaan sar」(白い月)という行事がある。丁度旧正月に相当するもので、厳寒の冬を無事に過ごして春を迎える喜び、年令を増やす喜び、新年を迎えた喜びを祝う牧民の神事である。この「tsagaan」は粉れもなく家畜乳の「白」である。家畜乳の「白」で、その年の幸運と豊饒を象徴させ、かつ新年の汚れなき神聖さを強調している。バンザロフによれば、「tsagaan sar」の「tsagaan」は、凝乳の「tsagaa」で、この語から生ずる形容詞は「tsagaan」となる。即ちこの「tsagaan sar」は「凝乳の月」の意であるとしている。そして欧州人が「白き」という意義の「tsagaan」をとって新年を「白き月」<sup>(13)</sup>と呼ぶようになったのだとしている。

マルコ・ポーロの記録によれば、当時この神事は八月二十八日(陰暦)に古くからモンゴル人の間に行われていた。フビライ汗は「白馬の乳を地上と空中に散布し」<sup>(14)</sup>て、諸々の精霊を供養し、平安と豊饒を祈念したという。バンザロフは、この「tsagaan sar」の神事が1月に移ったのは、フビライ汗が支那暦をもって新年を祝賀することをはじめた時からであろうと述べている。<sup>(15)</sup>いずれにせよ、家畜乳の「白」がこの神事の主役であることには違いはない。

また、モンゴルで広く行われている伝統的な競馬大会では、上位5着までの馬が「ayragiyn tav」(馬乳酒の5頭)と呼ばれて、頭や尻に馬乳酒が注がれて称賛される。モンゴルの競馬は、日本の相撲と同じように神へ奉納するものとして発展した神事である。馬乳酒は馬乳を発酵したもので透明ではなく、乳白色である。ここでも家畜乳の「白」は神聖なものとして扱われている。

また、「süün tsagaan setgeltey」(乳白の心をもつ人)という言葉がある。正直な、純真なといった意味で普通は「süün」(乳)が省略されて用いられることが多いが、「tsagaan」が家畜乳の「白」であることがよく分る。

モンゴルには「世界の三つ(四つ)」という格言的語句があるが、モンゴル



## モンゴル語における色彩語

人が何に「白」を感じるかをみるうえで参考になるので2、3例示してみよう。(「世界の三つ」は「Ertöntsiyn Gurav」<sup>(16)</sup>を参照にした。以下同じ)

※ Ösöxöd shüd neg tsagaan 成長する時の歯は白きものの1つ

Ötlöxöd üs neg tsagaan 老いる時の毛は白きものの1つ

Üxsen xoyno yas neg tsagaan 死んだ後の骨は白きものの1つ

※ Erdeniy züylees don neg tsagaan 宝物のうち貝は白きものの1つ

Evertniy züylees görööös neg tsagaan

有角類のうちグルースは白きものの1つ

(グルース=鹿の1種)

※ Entey züyleec esgiy neg tsagaan

幅のあるもののうちフェルトは白きものの1つ

Evderdeg züylees yas neg tsagaan

壊れるもののうち骨は白きものの1つ

ところでモンゴル語の「tsagaan」(白)は、どのような象徴内容をもっているであろうか。日本人は「白」を純粹、純潔、潔白、純真、明快、清浄、公明、善などの象徴として考えてきた。また「素<sup>しろ</sup>」という意味をもつことから染色、加工されていないもの、即ち物事のはじめといったとらえ方もしてきた。このように「白」のイメージはおおむね受容的であり、マイナスのイメージとして考えられるものとしては空白、空虚といったものぐらいである。そして、こうした受容的な「白」のイメージは諸民族間に共通的なものようである。

モンゴル語における「tsagaan」(白)も、ほぼ日本語と同じような象徴内容を有している。ポツベ教授はモンゴル語の「白」のもつ抽象的意味として、「純粹」(pure)、「清潔」(clean)、「潔白」(immaculate)、「清浄」(uncontaminated)、「正直」(honest)、「善良」(good-natured)などを挙げている。

また色彩名としての「tsagaan」は、いわゆる白色としての用法のほかに、

「明るさ、明るい色」(light, of light colour)、「より明るい」(well-lit)、「照らされた」(illuminated)、「輝く」(bright)、「開けた」(open)、「明白な」(obvious)といった使い方がされると指摘し、「tsagān nabtsi」(cabbage, white leaves—オルドス方言)、「xöngön tsagān」(aluminum, the white light one)、「tsagān mönggö」(silver)、「tsagān arxi」(vodka)、「tsagān gadzar」(an open place)、harin sagān (moon light—ブリヤート方言)、sagān hūni (a bright night—ブリヤート方言)などの例を示している。

ポッペ教授の説はほぼ肯定できるものであるが、このほかにもいくつかの象徴内容あるいは用法を指摘することができる。「tsagaan」が神聖な色として尊ばれる例は前述した。類似した性質のものではあるが、「tsagaan」が高貴な、侵すべからざる色としての役割を担っている例をみてみよう。「tsagaan yastay xūn」(白い骨をもつ人)という言葉がある。「yas」(骨)は出生、部族、氏族などの意味をもっており、日本が「血、血統」を大切にすると同様の意味で、モンゴル人は「骨、骨統」というものを尊重する。「白い骨統をひく人」、つまり由緒ある家柄の人、王公貴族、特にチンギス汗の血筋をひく者を指すことになる。

また、マルコ・ポーロの『東方見聞録』には、「そもそもカーン(フビライ汗)には、淡色にせよ斑点1つ交えない雪白の牝ウマ・牝ウマの馬群があって、その牝ウマだけでも1万以上に達するという莫大な頭数をなしている。この牝ウマの乳を飲むことを許されるのはただ帝室の者のみ、すなわちチンギス・カーンの後裔<sup>(18)</sup>だけに限定されている」という記述がある。

また「tsagaan」は幸運をもたらすものとして、吉兆の象徴であった。『東方見聞録』には、フビライ汗の元旦節の祝典の模様を伝えるなかで次のように述べている。「元旦には、カーンより以下その国人のすべてが、余裕のないものは別として、老幼男女を問わず白い衣装をつけるのが習慣となっている。それというのも、白い衣装は佳良なるもの、吉兆のものと見なされているからである。——また各地方、各王国からは金銀・真珠・宝

## モンゴル語における色彩語

石そのほかすこぶるりっぱな白布の類がカーンへの莫大な贈物として献上される<sup>(19)</sup>」。

「tsagaan」はまた豊さを象徴する色でもある。「tsagaan ger」(白いゲル—ゲルは椀を伏せた形のフェルトでできたモンゴルの移動式家屋、日本では中国語の「包」<sup>バオ</sup>の呼び名が一般的である)は「xar ger」(黒いゲル)に対して用いられるもので、文字通りフェルトの真新しい白いゲルを指す言葉であるが、貧乏人はゲルのフェルトが古くなって黒ずんでも交換できずに使用しているのに対して、裕福なゲルは常に新しい白いフェルトで覆われていることから「豊かな、裕福な家」の意となる。

また「tsagaan」は「簡素、単純、易しい」といった意味にも用いられる。例えば「tsagaan üseg」(白い文字)は、一般的には読み易い文字の意味で、ウイグル式の複雑な旧文字に対して、キリール文字を用いた比較的簡略な新文字を指したりする。アルファベットを「tsagaan tolgoi」(白い頭)と呼ぶのも同様の考え方からであろう。また「tsagaan xaniad」(白い風邪)、「tsagaan tomuu」(白いインフルエンザ)は悪性の風邪に対するもので、「軽い風邪」といった意味で使われる。これなども「単純、易しい」という意味の範疇に入るものであろう。

「tsagaan gazar」(白い土地)は平原、平野、「tsagaan zam」(白い道)は平坦な道と辞典には説明されている。ポツベ教授は「tsagaan gazar」を「an open place」として、用法の分類では「open」<sup>(20)</sup>の中に入れている。

「tsagaan」にはこのように平ら、滑らか、開けた、といった使われ方があるが、同時にそれとは反対のような意味にも使われたりする。例えば「tsagaan gazar」は、「開墾してない、未開の、人が足を踏み入れてない土地」という意味があり、また「tsagaan zam」も舗装された平らな道に対して、舗装のない草原の一般の道を指したりする。

## 5. 「Xar」(黒)

日本語の「黒」の語源は、クラシ(暗)と同源とみなすこれまでの一般的な説に対して、大野普氏が「涅」(黒泥)を主張するなど、まだ定説はないようである。

モンゴル語の「xar」(黒)はトルコ語の「qara」がその語源ではないかとする説が、有力なものとして支持されている。また小沢重男氏によって、モンゴル語の「黒」〈xar-qara〉と日本語の「暗し」〈クラシー kura〉あるいはモンゴル語の「黒褐色」〈xüren-küreng〉と日本語の「涅」〈クリー kuri〉が比定されるのではないかといった主張もなされている。

まず「xar」(黒)の意味を考えてみよう。「黒」が「白」との二項対立の関係にあって、しかも「白」が前項でみた如く、おおむね肯定的な意味を有するのに対して、「黒」が否定的、マイナスのイメージを強く有している色であることは日本語の場合と同様である。

また「黒」は「白」ばかりでなく、すべての色と対立し、それらの色を否定するといった性格をもっている。従って、モンゴル語の「xar」(黒)と名付けられる色は、日本語の場合と同じように真っ黒である必要はなく、他の色との関係において、相対的に黒く見えれば、「xar」と呼ばれるという性格をもっている。例えば、「世界の三つ」は次のようにいう。

※ Ayrag ni tsagaan bolovch arxi ni xar

Tsas ni tsagaan bolovch us ni xar

Tsaas ni tsagaan bolovch bichig ni xar

馬乳酒は白いけれども、アルヒは黒

雪は白いけれども、水は黒

紙は白いけれども、文字は黒

馬乳酒は醸造酒でドブクロクのような白色であるが、アルヒは蒸留酒で透明のものである。アルヒや水の透明さも雪や馬乳酒の「白」との対比から「黒」

とされる。

また「xar max」（黒い肉）という脂身の多い白っぽい肉の部分に対して、脂身のない赤肉を指す。まずい肉という意味合いも含まれているが、新鮮な肉で全く黒味を帯びたところがない、「赤い」色であるにもかかわらず「xar max」と呼ばれる。また、「xar us」（黒い水）という悪い水という意味にも使われるが、一般には深い湖の青さを表現し、「xar gazar」（黒い土地）が雪原に雪のない場所を指したりする。これらは「xar」（黒）という色名が、他の色と対立的な関係にあることをよく表わしている。

このように「xar」色を規定するのは、それが他の色と相対的關係下にあるために極めて困難であるが、モンゴル人の考える「xar」をみるうえで参考になるので、「世界の三つ」から二、三、「xar」に関連したものを抽出してみよう。

※ Tsasand mör xar	雪に足跡は黒
Tsaasand bichig xar	紙に文字は黒
Zargand üg xar	訴訟に言葉は黒

※ Dengüy bayshin neg xar	電灯のない建物は、黒きものの一つ
Süügüy tsay neg xar	乳の入ってないお茶は、黒きものの一つ
Süjiggüy sanaa neg xar	信仰のない心は、黒きものの一つ

（モンゴルのお茶は、沸かした茶の中に乳を入れたもので乳白色）

※ Ööx tosoor chimevch togoo xar	脂肪で飾ってもナベは黒
Od michideer chimevch shönö xar	星座で飾っても夜は黒
Alt mönggöör chimevch üs xar	金銀で飾っても髪は黒

日本語の「黒」の代表的な象徴内容は厳肅、莊重、静寂、沈黙、悲哀、不正、罪惡、失敗などであるといわれる。<sup>22)</sup>

モンゴル語の「xar」の場合はどうであろうか。まず「xar」の派生語およびフレーズ類の主なものを挙げてみよう。（『現代モンゴル語辞典』）

派生語 -xaraal（呪い、悪口）、xaraalch（言葉の下品な人、ののしり好き

な人)、xaraax (呪う、誹謗する)、xaravtar (黒味を帯びた)、xaragch (黒い一雌の家畜について)、xaranguy (暗色の、黒っぽい)、xaranxuy (暗い、無教養な)、xargis (残忍な、反動的な)、xarlag (黒斑の)、xarlig (平民、奴隷)、xarlax (色が黒くなる、状況が悪くなる)。

フレーズ—— xar bolox (還俗する)、xar salxi (暴風)、xar tamxi (阿片)、xar ajil (肉体労働)、xar xüch (暴力)、xar buux (後悔する、悲しむ)、xar sanaa (悪い考え、邪心)、xar nüd (黒い目)、

こうしてみると、モンゴル語の「xar」の用法および象徴内容は、日本語と極めて類似した性格をもっていることがわかる。ポッペ教授は、このモンゴル語の「黒」の象徴内容を次の十二項目に分類している。<sup>23)</sup>

- ①敵意、悪意、悪行の形容—— xar sanaa, xar dotortoy, xar elegtey
- ②不正、不誠実の表現—— xaraar olson zoos, xaraar edlen av
- ③他の悪行、欠陥の表現—— xar xeltey, xar xel am bolov
- ④悪口、ののしり、のろい—— xar noxoy, xar xiatad, xar yastan
- ⑤不幸とその原因となるものの表現—— xar buux, xar ödör
- ⑥悲嘆の表現—— xar ödör
- ⑦簡素、通常、原始的、未完成の表現—— xar xün, xar xel
- ⑧純粹、清潔、孤独、裸の表現—— xar us, xar max
- ⑨強大、強力 of 表現—— xar salxi, xar tamxi, xar shuurga
- ⑩自己、自分自身—— xar bie zovox, xar бага nasnaas
- ⑪強調的要素として—— xar tsag, xar ert
- ⑫概括化の要素として—— dans xar, mori xar, xün xar

このポッペ教授の分類はおおむねは肯定できるものではあるが、若干の疑問もある。

まず第一には⑫「概括化の要素」(As a generalizing element)という項目をたてている点である。モンゴル語の「黒」を意味する「xar」にはそうした用法は存在しないのではないかと考える。ポッペ教授は、例として dans

xar (帳簿)、mori xar (あれこれの馬、馬群)、xün xar (誰彼、人々) などを提示しているが、この場合の「xar」は、「黒」の「xar」ではない。これは連語を構成する場合に、その第二成分として集合的な意味を表わすもので、「黒」の「xar」とは音形は同じものであるが別個の語根で、同音異義語と考えるのが妥当である。

第二には、xar bie zovox, xar бага наснаас を「自己、自分自身」(self, one's own)の項に入れている点である。「xar」が「自己、自分自身」を表わす用法はあるが、この「xar бага наснаас」の場合の「xar」は、「бага」(子供)の意を強める役割を果たすもので、「xar бага」で「ごく幼少、みどり児」を指す。また「xar bie zovox」を「to exhaust oneself」と訳しているが、「xar」は「bie zovox」(体が疲れる)にかかって「無駄に、利益もないのに」という意味となり、「無駄骨をおる」と訳される性質のものである。従って、全体の文構成の中から「無駄骨をおる」「ごく幼少の時から」が「自分自身」を想定することは不可能ではないが、「xar」自体にそれを求めるのは無理である。むしろ、この場合の「xar」の用法は「強調的要素—しかもマイナスの強調—」のなかに入れるべきではないだろうか。

この他、「xar tamxi」(阿片)を⑨「強大、強力」の表現に、「xar max」(脂肪分の白肉に対する赤肉の部分)を⑧「純粹、清潔等」の項目になぜ入れたのか等も疑問である。

またポッペ教授の分類にないもので、頻繁に表われる象徴内容としては「貧乏、貧弱」がある。例えば前述したように、「tsagaan ger」(白い家)が裕福な家を象徴するのに対して、「xar ger」(黒い家)は貧乏な家の象徴である。

概して、上にみたように「xar」は、個々の象徴的表現としてはマイナスのイメージで象徴されることが多いが、色彩としての「xar」は口承文芸などには、時折その物語のクライマックスの場面に用いられて、聞き手、読み手に強い印象を与える役割を負ったりしている。『元朝秘史』をしてみる

と、その役割が顕著である。

『元朝秘史』には「xar」が約40ヵ所にわたってあらわれる。「白」(tsagaan)が10数ヵ所、「青」(xöx)、「黄」(shar)に至っては数ヵ所に過ぎないことを考えると突出した多さである。

そして、その「xar」の多くが、その場面、出来事の厳肅さ、強力、強大さ、荘重などを一層強調し、物語全体に迫力を与える役割をしている。次の例はその一例である。

チンギス汗の生い立ちを、母ホエルンがチンギス汗(当時テムジン)に語る場面<sup>(24)</sup>に、

「わが女陰より

雄叫びて 生まれ出ずるに

手に黒き 血こごり握りて

〔汝は〕生まれき」

という一節がある。黒き血こごりを握って生まれたという表現によって、チンギス汗の出生時からの尋常一様でない強さ、凄味を強調している。

詳述は避けるが、『元朝秘史』には上と同様な意味合いで「黒き林」、「黒雄ラクダ」、「黒き雄牛」、「黒き血」、「黒き夜」などが各所にあらわれ、それぞれの場面、物語全体を盛り上げている。

## 6. 「Xöx」(青)

日本語の「青<sup>アヲ</sup>」という色の範囲は漠然としていてつかみにくい。前田雨城氏は青色の範囲について、「日本の『あお』は、『あか』という暖色系であり明るい感じのする色彩群に属さず、また『くろ』という寒色系の色彩群<sup>(25)</sup>にも属さないところのいわば、視覚的に中間と感じる色彩すべての総称といえるだろう」と指摘している。また語源については、大野普氏が「アヲという色名はアヰ(藍)という植物と関係あることは間違いないと思われる<sup>(26)</sup>」と推定している。



## モンゴル語における色彩語

モンゴル語の「xöx」(青)の範囲も前項「モンゴル語の色名」で分るように緑寄りの青から紫寄りの青、あるいは灰色がかった青と幅広く、その範囲を限定する指示的性格が乏しく、漠然としている。

また「xöx」に関連したフレーズのいくつかを辞書類から抽出してみると、「xöx uniar」(青みがかったかすみ)、「xöx utaa」(青い煙)、「xöx övs」(刈り入れたばかりの青草)、「xöx budaa」(裸麦、ライ麦)、「xöx nogoo」(青物、青草)などがある。この青い草や青いライ麦、青いかすみが実在する対象の色とはいえない。これらの「青」は、緑や白を表わす一種の文飾の役割を果しており、抽象的な意味合いが強い。

このようにモンゴル語の「xöx」は、日本語の「青」の場合と同じように、その範囲は漠然としており、またその性格は抽象的な意味合いが強く、実体感に乏しいという特徴をもっている。事実、青い物質や生物など、青い色の具体的な対象物は自然環境のなかにはほとんど見られない。結局、経験できる青い色とは、実体のない、つかみどころのない空の色であり、海や河川、湖沼の水の青さであったことが、そうした青色の性格を決定づけたものであろう。モンゴルの「世界の三つ」は「xöx」について次のように表現している。

※ Uudam delxiyn tenger neg xöx

Untrax galin döl neg xöx

Ursax golin us neg xöx

広大なる世界の空、青きものの一つ

消えんとする火の焰、青きものの一つ

流れ去る川の水、青きものの一つ

空の青、焰の青、水の青にはいずれも固有の見え方はなく、その時どきの光や熱の条件によって変化するもので、普遍的に経験される色であるにもかかわらず、漠然とした、実体のない色である。この「世の青きもの」は、実に的確に青色の特徴を表現している。

「xöx」と同系色で「空色、淡青色」と訳される「tsenxer」という色名がある。「モンゴル語の色名」項の色名一覧で分るように、おおむね「xöx」が灰色から紫色がかった系統の青色を指すのに対して、「tsenxer」は白味がかった明るい系統の青色を指すものと理解される。前掲 Tsevel 編、小沢編の辞典にも「白味がかった青、白っぽい青」の説明があり、また「tsenxer」の派生語に「tsenxiyx」（色があせる、くすむ、青白くなる）があることから「白味がかった青」であることは想像つくが、「紺碧」を「tsagaan tsenxer」、「濃縹」を「nogoonduu tsenxer」、「群青色」を「xöx tsenxer」、あるいは「桔梗色」を「trenxer yagaan saaral」とよぶなど、「xöx」との色彩上の相違はなお判然としない色である。「世界の三つ」にあらわれる「tsenxer」からも「xöx」との相違は、厳密な意味では明確ではない。

※ Xoloos xaragdaj baygaa uul neg tsenxer

Xonxort baygaa us neg tsenxer

Xorvood baygaa tengen neg tsenxer

遠くに見える山は、青きもの〔tsenxer〕の一つ

深みにある水は、青きもの〔tsenxer〕の一つ

宇宙にある天は、青きもの〔tsenxer〕の一つ

「xöx」と「tsenxer」の相違は、色彩上からは上述したように明確ではないが、象徴内容には大きな違いを見出すことができる。即ち、モンゴル人にとって「xöx」は深く、かつ広い象徴内容をもつものであるのに対して、「tsenxer」は色彩としての役割が主で、ほとんど抽象的意味をもたない。同系統の色彩ではあるが、モンゴル人は「xöx」という色と言葉に特殊なイメージを抱いているということである。例えば辞典類を見てみると、「tsenxer」は小沢編には、「tsenxer dalay」（紺青の海）のフルーズが一つ挙げられているだけであり、また Tsevel 編にも民話の引用による「xöx tsenxer dalay」（群青色の海）の語がみえるだけで抽象的、象徴的イメージは全く連想され得ない。これに対して、「xöx」は後述するように多くの

象徴内容を有している。

日本語の「青」の主な象徴語、連想語として考えられるものには沈着、冷淡、悠久、真実、冷静、静寂、知性、軽快、新鮮、透明、涼しさ、淋しさなどが考えられようか。「青」は、色彩としての性格が漠然としているだけに、その象徴的効果は高いようである。

モンゴル語の「xöx」には、日本語ほどの幅広い象徴内容はないようであるが、日本語の「青」には余り見られない「xöx」信仰ともいえる特異なものを指摘することができる。

モンゴルには、モンゴル人が好んで用いる「xöx tengger」（青き天）という言葉がある。「tengger」（天）は古来モンゴル人の畏敬の対象であった。モンゴル遊牧民は、厳冬には零下30度、40度に達する過酷な自然環境のなかで、営々と遊牧の生活を続けてきた。彼らは、この過酷な自然の脅威には、なす術もなく、ただ畏れ、祈ったのである。遊牧民にとって、畏敬すべきその自然とは「tengger」であった。それは虚なる空でもなく、抽象的な天でもない。彼ら自身の頭上を覆う天そのものであったのである。モンゴルは降水量が極端に少なく、快晴の日が続く。従って、彼らの畏敬する「tengger」は常に「xöx」（青）であった。「tengger」には、「xöx」が枕詞のようについて「xöx tengger」という形であらわれることが多いが、この言葉には、単に「青い色をした空」といった意味を越えたものがある。「xöx」という色はモンゴル人には神秘的な、崇高な色として認識されているようである。

モンゴル人は自国を「xöx monggol」（青きモンゴル）と誇らかに呼ぶ。モンゴルの国旗は、縦に三等分して両側は革命のシンボルの赤で、その中央は「青い」空の色である。また国章も、中央には太陽に向って疾駆する騎馬の牧民が描かれているが、国章の上半分を占める背景には「青い」空が広がっている。そして、その国章の下部には、革命の赤がモンゴルの「青い空」をはさむ形をした国旗と同じ配色のリボンが結ばれている。この国旗や国

章の「xöx」は革命以降に移入されたものではない。モンゴル民族が長い歴史のなかで育み、尊んできた色にはかならない。

ところでポップ教授は、この幅広い色相をもつ「xöx」の用法を blue, grey, green の各系統および暗色、混合色に分類していくつかの例を提示している。

そして、その内抽象的意味としては、grey 系統のものだけを説明して、次のように分類している。

①退屈、困難、不愉快 — xöx xavar, xöx xereg

②<sup>なま</sup>生の、強力の — xöx shir, xöx oroldlogo

③濃い、ただ……だけ — xöx tsay, xöx max

「xöx」の象徴内容としては、ポップ教授の指摘以外にもいくつか見出すことができる。例えば、「xöx nogoo」（青い野菜、青い草）は、ポップ教授は「green grass」と訳している。確かに「青い草」はあり得ないもので「green grass」には違いないが、この「xöx」（青）は、草の緑がまだみずみずしさを失っていない新鮮さを強調している。「xöx övös」（青い干草）の「xöx」も同様に「新鮮」さの象徴である。

また、モンゴルには「xöx devter」（青き文書－元朝時代は、正式には青冊、戸口青冊と呼んだもの）というのがある。これはチンギス汗が命じて、各戸の家産の分配、訴訟事件などを白い紙上に青いインクのようなもので書き記した「戸籍簿」で、チンギス汗の意志により決して書き直しが許されない権威あるものであった。現物は全く残存しないが、これが存在したことは多くの歴史書によって証明されている。また、「xöx sudar」（青い年代記）と呼ばれる一書がある。これはモンゴル人の書いたモンゴル王朝の年代記である。この両書の表題の「xöx」には共通した意志が感じられる。即ち「xöx devter」はチンギス汗の命によって書き記されたものであり、「xöx sudar」はモンゴル王朝の正統史を意図して編まれたもので、いずれも、その「xöx」には「崇高な、侵すべからず」といった象徴内容を含んでいる

と考えられよう。

モンゴル語の「xöx」の特徴的なものの一つに、しばしば「xöx」(青)と「tsagaan」(白)の二項が対の形をとってあらわれるということがある。「青」と「白」の対は日本にも見られるようであるが、「白」と「黒」あるいは「赤」と「黒」の場合ほどには、諸民族間に普遍性の高いものではないものようである。モンゴルでは「tsagaan」(白)は「ulaan」(赤)、「xar」(黒)、あるいは「shar」(黄)などとの二項対立の形であらわれるが、「xöx」は、ほとんど「tsagaan」との関係においてのみあらわれる。

例えば、M. ミハイロフスキーは、天神バイ・ユルゲンを祀る時のシャーマンの歌の一節を次のように記録している。

「白い空の下を、白い雲の上を  
青い空の下を、青い空の上を、鳥よ、飛べ、天に<sup>28)</sup>」

また『元朝秘史』にも次のような一節がみえる。

「シギ・クトクウ〔よ、汝こそ〕は朕と相謀りて、規則定めて、青き文字にて真白き紙上に文づくりぞたるを〔いたずらに〕改むることなからしめよ。改むる人〔あらば〕そは罪あるものとせよ<sup>29)</sup>」

これは前述した「xöx devter」(青き文書)に関する一節である。

また W. ハイシヒは、ラマ僧イシダンジンワンジル(1854～1907)の「將軍廟の賢者のことば」という批評・教訓的小冊子の次のような詩を紹介している。

「るりさんごの青や白の  
頂子<sup>30)</sup>(帽子につけた位階の丸い玉)をつける程の者なら  
勘考つくし、平安、かつ賢明に  
しっかりした政治をやるべきだ……」<sup>30)</sup>

上の例で明確のように、モンゴルの「xöx」と「tsagaan」の二項の対は、「白」と「黒」、「赤」と「黒」といった正反対の二項対立の関係ではない。「xöx」と「tsagaan」が共通してもつ「崇高な、尊き」といった同類のイメージを

一組として、その「崇高」さを強調している。

## 7. 「Shar」(黄色)

「黄色」は民族によって、あるいは同民族においても時代によって受取り方に大きな相違がみられる色である。インドでは黄色が光輝のシンボルであるのに対して、ブラジルでは絶望を意味し、回教では死のシンボルともなっているということである。中国では黄色は高貴な色の部類に入り、偉大さや神聖さを表わすが、英語では憶病、卑屈を意味し、また日本では、平安時代、王朝の衣の色としては位階は低いものであった。

また、現在の日本人の「黄色」の象徴内容の主なものを挙げると希望、発展、光明、歓喜、快活、輕薄、猜疑、優柔などであるといわれる。<sup>(81)</sup>これを見ると、「希望、発展」といった明るいイメージがあるかと思うと「輕薄、猜疑」といったマイナスのイメージがあるといったように両面性をもっている。このように、一つの色がプラス・マイナスの両面性をもつのは「黄色」に限ったことではなく、多くの色に見える現象ではあるが、「黄色」の場合は特にそれが強いようである。それは、「黄色」が一方では「金」の色に繋り、他方では「黄葉、枯草」に繋ることと関連するのではないか。「金」へ繋がる「黄色」は中国の宮廷の色となり、「黄葉」は究極には「黄泉の国」を連想させることとなったのであろう。因に大岡信氏は万葉の黄色について、「茜などの赤い色がずいぶん出てくるのに比べて、黄色は黄泉路のことなどを歌うとき以外には僅かしか出てこない」<sup>(82)</sup>と述べている。

さてモンゴル語の「shar」(黄色)の場合はどうであろうか。まず、モンゴル人がとらえる「shar」とはどんな性格の色かを『元朝秘史』に見てみよう。

『元朝秘史』をみると、「shar」があらわれる箇所は8箇所ある。しかし、この内の3箇所は中国の地名( shar-xeer = 黄色い平原の意 - 北京郊外の黄壇つまり龍虎台を指す)で色彩の「shar」とは無関係のものである。従って

『元朝秘史』にあらわれる色彩的要素をもった「shar」は僅か5箇所である。その5箇所のうち、2箇所は「alt」（金）と連語となって「shar alt」（黄金）の意味に用いられており、色彩とは言い難い。

また残る3箇所も次に述べるように、「shar」は光の感覚としてとらえられていて、純粋な意味での色彩ではない。その場面は次のようなものである。

アラン・コア（Alan-qo'a）が日月神の精を受けて、チンギス汗をも含むモンゴルの三大氏族を生んだとする有名な場面である。彼女は夫ドブン・メルゲン（Dobun-mergen）と死別したあとで、光を感じて受胎し、三人の子供を出産するが、子供達の間に、夫がないのに子供を生んだという疑惑が生じた時、5人の子供（二人はドブン・メルゲンの子）にアラン・コアは次のように説明する。

「夜ごとに光る黄色の人（shar xün）が、家の天窓の戸口の明るみづたいに入って[来て]私のお腹をさすって、その光はお腹の中にしみ通って行くのでした。〔そして〕出て行く時は、日月の光線に沿うて、黄色い犬（shar noxoy）<sup>94)</sup>のようにはい出て行くのでした。——」

この場合の「黄色い人」、「黄色い犬」は、ともに光そのものであることは容易に理解できる。

また巻10には「暁の〔ようやく〕黄ばんできた頃」（shönö üdür shar-da）という表現がある。この「shar」も夜明けの光の状況を表わしている。

「shar」の派生語「sharga」（馬の毛色名—薄鹿毛馬、河原毛馬系統）は馬名として12箇所にわたってあらわれているが、色彩としての「shar」は一語も使われていないということになる。これをもって『元朝秘史』当時のモンゴル人の「shar」のとらえ方を即断することは出来ないが、少なくとも「shar」が光を象徴するものであり、また、それは彼らの信仰の対象であった「tengger」（天）と深く結びついた、犯し難い一面をもっていたものであったことは仮定し得る。現在でも「namrin shar nar」（秋の黄色い太陽）

という言葉が使われる。秋の日ざしを指しているが、この場合も光が「shar」で表現されている。

16世紀半ば過ぎ、モンゴルにラマ教(黄幅派)が広まるに従って、「shar」は特殊な地位を獲得することになる。ラマ教は最初、フビライ汗の元王朝期にモンゴルに伝播するが、この時のラマ教は上層階級の間にのみ行われ、一般民衆の中に浸透することがなかったため、元朝の崩壊とともに急速に消失してしまう。そして、16世紀後半のアルタン汗の青海、チベット遠征を契機に再びラマ教がモンゴルに広まることとなる。

元朝時代のラマ教は、僧侶が紅衣紅帽であったので紅教と呼ばれ、アルタン汗以降に伝播したものは黄衣黄帽であったため黄教( shar shashin - 黄い宗教)と呼ばれている。黄教は、14世紀チベットにおいて、ツォンカパによる宗教改革によって生れた新教で、清朝によって保護・奨励されモンゴル全土に普及した。最盛期には成人男子の4人に1人がラマ僧という盛況振りであったが、1921年の社会主義革命以降急激に衰退し、現在は年寄りを中心に細々とした活動が行われているに過ぎない。

このラマ教の隆盛によってラマ僧が尊敬の対象となり、さらには、ラマ僧の身につける黄衣黄帽の「黄色」も神聖な色として崇められることになったのである。一般市民が黄色の衣服を着ることも禁止された。昭和の初期、モンゴルを調査旅行した鳥居きみ子は「蒙古人は色の第一位に黄色を置いて居ります。之は蒙古人が古来太陽を尊拝する故もありまじやうし、又一つには黄金というものを非常に尊いものに思つて居る處がありまじやう。然し太陽の黄はやはり白に近い色であります。喇嘛教の影響を受けてからは、喇嘛の色などと申して居ます<sup>85)</sup>」と報告している。

ラマ教は別に特殊な宗教ではなく、チベット系の大乗仏教であるが、モンゴル人は仏教( burxan shashin )という一般的な呼称に対して、ラマ教を「shar shashin」(黄色い宗教)と呼び、僧侶を「shar xün」(黄色い人)と呼んでいる。僧侶以外を「xar xün」(黒い人)、在来宗教のシャーマニズム



## モンゴル語における色彩語

を「xar shashin」(黒い宗教)と呼ぶなど、まさに「shar」はラマ教の色となった。

「世界の三つ」は「shar」の代表的なものとして次のようにいう。

- |                           |                   |
|---------------------------|-------------------|
| ※ Erdened alt neg shar    | 宝石の中で金は、黄色きものの一つ  |
| Erend janch neg shar      | 男にとって僧服は、黄色きものの一つ |
| Ideend uurag neg shar     | 食物の中で初乳は、黄色きものの一つ |
| ※ Ogtorguyn dund nar shar | 大空の中で太陽は黄色        |
| Olni dund xuvrag shar     | 大衆の中で僧侶は黄色        |

家畜の初乳が黄色の代表的なものとしてあらわれるあたりは、実に遊牧民らしい。

モンゴル語の「shar」という色は、上に述べたように、モンゴル人の畏敬する天、太陽に関連づけられる色として、あるいはラマ教信奉から「尊き色」となったが、反面「shar」は「下らないもの、下品な」といった軽蔑的な意味をもち、あるいは、それを強調する用法に使われたりする。例えば次のような諺がある。

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| ※ Shar noxoyñ gedsend | <u>黄色い犬</u> の腹には  |
| Shar tos zoxixgüty    | <u>黄色い油</u> は合わない |

「黄色い犬」とは、質の悪い、野良犬のような犬を指し、「黄色い油」とはバターのこと、モンゴル人にとっては上等の大切な食べ物である。野良犬の腹にはバターは合わない——つまり身分不相応を指す諺である。

また「shar tsaraytay」(黄色い顔をもつ人)という言葉がある。これは「青白い顔」の意であるが、「未熟な者、青二才」という軽蔑的な意味となり、「臆病者」の意味にも使われたりする。

「demiý」(いたずらに、下らない)の前に「shar」をつけて「shar demiý」といった言い方がよくされる。ここでは「shar」は「demiý」を強調する意に用いられ、「全く下らない、全く無意味な」といった意味となる。同様な用法で「shar xudal」(黄色いウソ)は真っ赤なウソの意となる。ただし、

このような強調の用法として「*shar*」は、良い意味の場合には使われず、悪い意味の場合にのみあらわれる。

このほか、「*shar*」の用法としては、本来の色より白っぽい色、薄い色を表現する時に用いられたりする。「*shar üs*」(黄色い毛)は細い体毛、「*shar xün*」(黄色い人)は黄(赤)毛、つまり白人、「*shar temee*」(黄色いラクダ)は淡いラクダ毛色のラクダを指すなどがその例である。

### む す び

以上、モンゴル語における色彩語とモンゴル人の色彩観を述べてきたが、一般的、表面的な言及に終わってしまった。また、色彩についても、「白」、「黒」、「青」、「黄色」の四色しか取り上げられなかった。「赤」、「茶」、「緑」、「灰色」等その他、モンゴル人の生活に密接に結びついた、考察しなければならない色は少なくない。また、色名、色彩観の時代的変容、現代モンゴル文学にあらわれている色彩観などにも触れたかったが果せなかった。これらは稿を改めて考察したいと思っている。

### 注

- (1) 小沢重男編著「現代モンゴル語辞典」、大学書林、昭和58年
- (2) A. モスタールト著、磯野富士子訳「オルドス口碑集」、81頁、平凡社、昭和41年
- (3) 村上正二訳注「モンゴル秘史Ⅰ」、111頁、平凡社、昭和45年
- (4) 原題を「*Monggol-un Niguc'a Tobc'aan*」(モンゴルの秘められたる史)といい、一般にはその漢字音訳本である「元朝秘史」の名で流传されているもので、モンゴル族の始祖伝承からはじまり、チンギス汗の生涯を中心にモンゴル帝国成立を物語った年代記的歴史文学である。
- (5) N. Poppe、The Use of Colour Names in Mongolian, The Cana-

da-Mongolia Review, vol. 3, No 2

- (6) 赤池鉄士著「英語色彩の文化誌」、4頁、研究社出版、1981年
- (7) 内蒙古大学蒙古語文研究室編「蒙漢簡明詞典」、北京、1976年
- (8) F. D. Lessing, Mongolian English Dictionary, University of California Press, 1960年
- (9) J. Dashdorj, G. Renchinsambuu, Monggol Tsetsen Ügiyn Dalay I, II, Shinjlex Uxaani Akademiyn Xevlel, Ulanbaatar, 1964年, 1966年
- (10) 前田雨城著「日本古代の色彩と染」、32頁、河出書房新社、昭和55年
- (11) 福田邦夫著、日本色彩研究所編、「赤橙黄緑青藍紫」、223頁、青娥書房、昭和55年
- (12) 遊牧起源は、森林地帯で狩猟生活を送っていた人びとが、その周辺に野生する群をなす有蹄類の後ろについていく過程で発生したとする「狩猟社会起源説」、オアシス地帯の農耕民が、その周辺の動物を捕獲して飼育し、やがてステップに出て牧畜を専業とする人びとが出現したとする「農耕社会起源説」があり、主に後者が支持されている。
- (13) バンザロフ著、白鳥庫吉訳「黒教或ひは蒙古人に於けるシャマン教」、52頁、新時代社、昭和15年
- (14) マルコ・ポーロ著、愛宕松男訳注「東方見聞録」、172頁、平凡社、昭和51年
- (15) 前掲、バンザロフ、51頁
- (16) Ts. Ölziyxutag, Ertöntsiny Gurav, Ulaanbaatar, 1961年
- (17) cf. N. Poppe, pp. 123
- (18) 前掲、愛宕松男訳注「東方見聞録」、170頁
- (19) 前掲、愛宕松男訳注「東方見聞録」、226頁
- (20) cf. N. Poppe, pp. 123
- (21) 小沢重男著「モンゴル語と日本語」、254、317頁、弘文堂、昭和53年

- (22) 松岡武著「色彩とパーソナリティ」、41頁、金子書房、昭和58年
- (23) cf. N. Poppe, pp. 120、121頁
- (24) 前掲、村上正二訳注「モンゴル秘史Ⅰ」、112頁
- (25) 前田雨城著「色」、33頁、法政大学出版局、1980年
- (26) 大野普著「日本語の世界」、朝日新聞社、1976年
- (27) cf. Poppe、pp. 130
- (28) M. ミハイロフスキー著、高橋勝之訳「シベリヤ、蒙古及び欧露の異民族間に於けるシャーマン教」、88頁、新時代社、昭和15年
- (29) 前掲、村上正二訳注「モンゴル秘史」、398頁
- (30) W. ハイシッヒ著、田中克彦訳「モンゴルの歴史と文化」、65頁、岩波書店、昭和42年.
- (31) 前掲、赤池鉄士著「英語色彩の文化誌」、77頁
- (32) 前掲、松岡武著「色彩とパーソナリティー」、41頁
- (33) 大岡信編「日本の色」、18頁、朝日新聞社、1979年
- (34) 前掲、村上正二訳注「モンゴル秘史」、29頁
- (35) 鳥居きみ子著「土俗学上より観たる蒙古」、1,044頁、東京六文館、昭和6年